

指標名: 国際収支(2011年10月)

発表日2011年12月8日(木)

~貿易収支の赤字転落により低調な推移~

第一生命経済研究所 経済調査部
 担当 エコノミスト 星野 卓也
 TEL : 03-5221-4526

		原数値 経常収支 (億円)	季調値 経常収支 (億円)	貿易・サービス収支			所得収支
				貿易収支	サービス収支		
10	7月	17187	15593	7403	8152	▲ 749	9126
	8月	11429	12309	3943	5045	▲ 1102	9586
	9月	20175	16145	5676	6470	▲ 794	11401
	10月	14949	15127	4722	6049	▲ 1327	11393
	11月	9554	12695	3217	4772	▲ 1555	10308
	12月	11979	15386	6255	6960	▲ 705	10042
11	1月	5472	11787	3598	3924	▲ 326	9272
	2月	17008	12748	3752	4873	▲ 1121	11494
	3月	17386	8062	▲ 1517	300	▲ 1817	10108
	4月	4124	5759	▲ 6987	▲ 5556	▲ 1431	13487
	5月	5859	3857	▲ 8089	▲ 7025	▲ 1064	12890
	6月	5389	9372	▲ 798	92	▲ 890	11287
	7月	9902	7525	▲ 2740	▲ 410	▲ 2329	11129
	8月	4075	6526	▲ 4099	▲ 1992	▲ 2108	11371
	9月	15848	11866	▲ 541	919	▲ 1460	13277
	10月	5624	5186	▲ 6727	▲ 5269	▲ 1458	12777

(出所)財務省「国際収支統計」

○ 10月の経常収支(原数値)は前年比▲62.4%の5,624億円

10月の経常収支は、5,624億円の黒字と、コンセンサス(5,072億円、レンジ:2,470億円~8,500億円)を若干上回った。前年比で見ると、▲62.4%と8ヶ月連続の黒字幅縮小である。海外経済の減速を受けた輸出の伸び悩みや、資源調達コストの増大による輸入の増加に伴い、貿易収支が弱い動きとなっていることを背景に、経常収支黒字は前年比マイナスでの推移が続いている。

○ 経常収支(季節調整値)は貿易収支の赤字転化を主因に黒字幅縮小

経常収支の季節調整値は、5,186億円の黒字(9月は1兆1,866億円の黒字)と黒字幅が大きく縮小した。内訳をみると、貿易収支は5,269億円の赤字(9月は919億円の黒字)となった。世界的な景気減速を背景に輸出が前月比▲4.4%と低下する一方、輸入は同+7.1%と9月から増加したことから、貿易収支は赤字に転落した。

所得収支は、1兆2,777億円の黒字(9月は1兆3,277億円の黒字)となった。月次で見れば黒字幅は縮小したものの、均してみれば底堅く推移していると言えよう。過去に積み上げた巨額の対外資産を背景に、所得収支は高水準の黒字を保ち、経常黒字の維持に寄与している。

サービス収支は、支払の増加から輸送収支・旅行収支は赤字幅が拡大したが、その他サービス収支の黒字幅が拡大したことにより、1,458億円の赤字と(9月は1,460億円の赤字)ほぼ横ばいの動きとなった。なお、震災の影響から低水準での推移が続いている旅行収支の受取は、前月比+0.6%の766億円(季調値)と2ヶ月連続の増加となったが、震災前水準(2011年2月:957億円)には届いていない。今後も震災に加え、円高や海外景気

減速の影響から、訪日外国人数の回復ペースは非常に緩やかなものに留まる可能性が高いため、旅行収支の受取額は震災前を下回る水準での推移が続くものとみられる。

○ 円高の進行を背景に対外資産残高は直接・証券ともに減少

同日発表された、「対外資産負債残高(四半期推計値)」によれば、9月末時点の対外直接資産、対外証券資産は、ともに6月末時点から減少した。

今回の対外資産の減少については、円高の進行や株価の低迷により円建てでみた資産価額が押し下げられた影響が大きい。特に円相場については、6月末から9月末にかけて対ドルで4.4%、対ユーロで11.8%円高が進展している。資本収支から見る限り、7-9月期も対外資産の取得は進んでいたものの、円高などの評価減による資産価額の減少分は資産取得による資産価額増加分の約2倍(筆者試算)となっており、全体でみれば資産が減少する格好となった。

ただし足元では円高の進行には一服感が見られることを踏まえると、12月末の為替要因による押し下げは小幅なものに留まるものとみられ、対外資産残高は増加に転じる可能性が高いだろう。そのため、足元で経常収支の下支えとなっている所得収支については、対外資産の増加→所得収支受取の増加→所得黒字拡大、という流れを踏んで、引き続き底堅い推移が期待されよう。

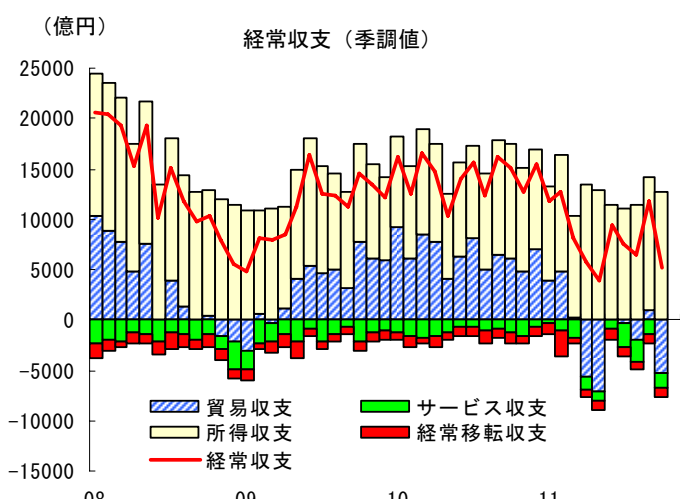
○ 低調ながら経常黒字は維持される見込み

このように、10月の経常収支(季節調整値)は貿易収支の赤字転化を主因に、9月から黒字幅を縮小した。

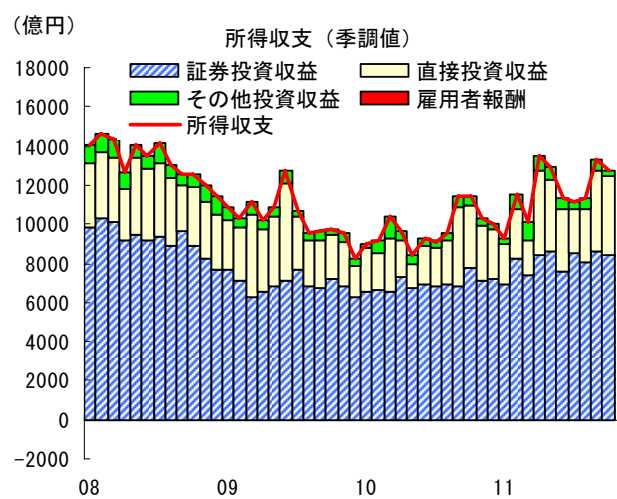
今後も、経常収支は貿易収支の弱さを主因に低調な推移となろう。輸出は海外経済の減速から、伸び悩みが続く公算が大きい。輸入は燃料コスト増加の影響から高い水準での推移が続くことが見込まれるため、当面は貿易収支(季節値)が安定した黒字基調へ復帰することは難しいだろう。

所得収支は、先述したように底堅い推移が予想される。ただし、①足元の経常黒字が低調に推移していることによる対外資産の積み増しペース鈍化、②米国長期金利低下による低利回り債券のウェイト増加、などが長い目で見れば黒字幅拡大の抑制要因となる可能性がある。

だが、当面は所得収支が経常収支黒字の下支えとなることに変わりはない。貿易収支の弱さから黒字幅は低水準に留まるものの、季節調整値でみた経常収支は黒字が維持される可能性が高いだろう。

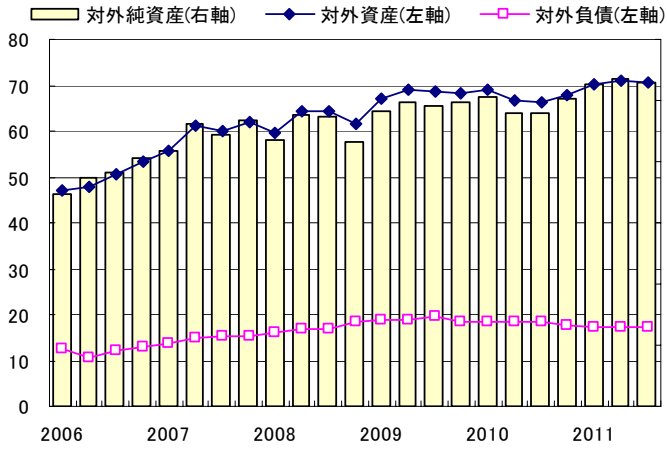


(出所) 財務省「国際収支統計」



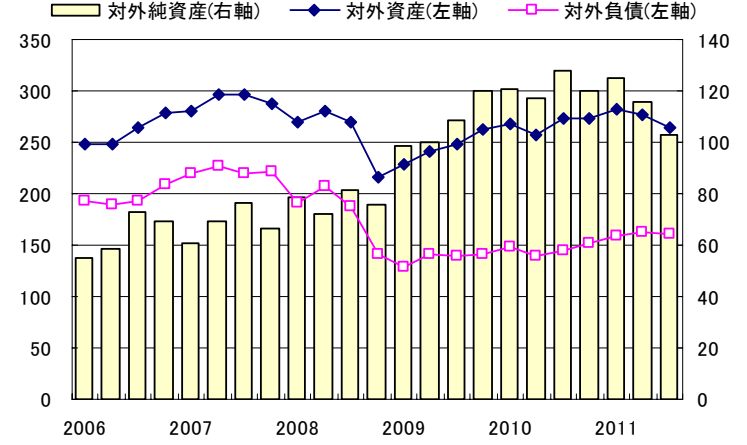
(出所) 財務省「国際収支統計」

対外直接資産・負債(兆円)



※2011年分は財務省による推計値
(出所)財務省「対外資産負債残高」

対外証券資産・負債(兆円)



※2011年分は財務省による推計値
(出所)財務省「対外資産負債残高」